

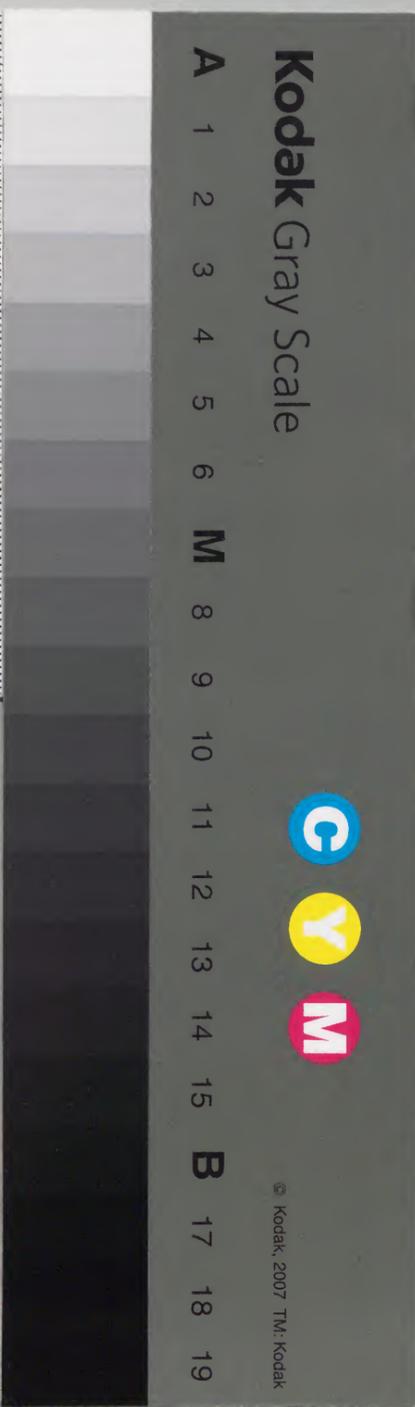
治平金訓

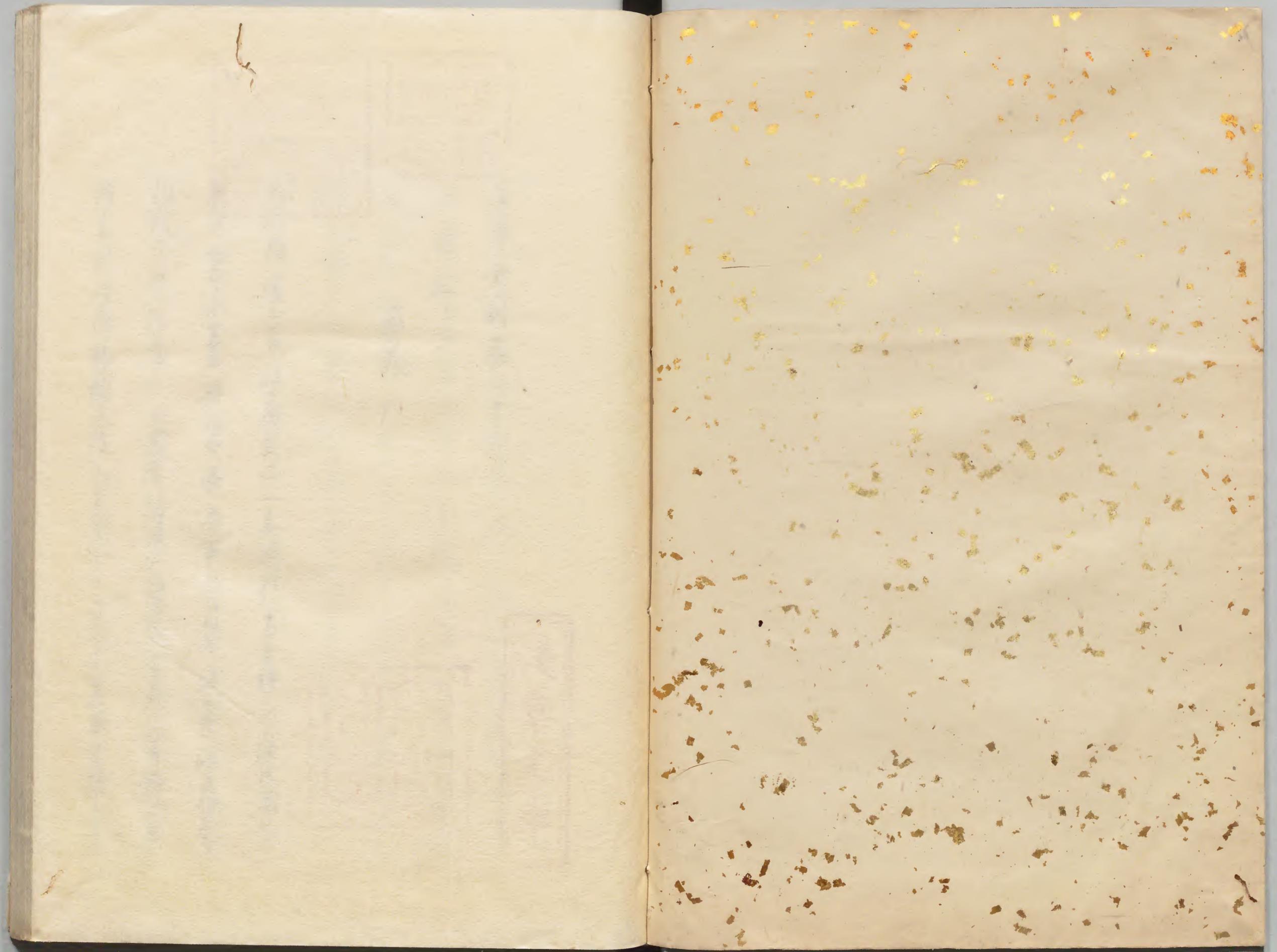
二十六

		一九〇五	和書門
三〇	二八	三〇	類
冊	架	函	

庫	文	閣	内
九〇	九〇	五〇	和書
函	三〇	冊	類
八	冊	號	
架			

内閣文庫	
番號	和 19050
冊數	30 ( 26 )
函號	190 120







治平金訓卷三十二

臣五

蔀義

淺草文庫



大河内源三郎以房天正二年賂於高秀神の城を圍ふ  
軍出を小笠原共以房長右軍乃日射源三郎以房也  
相續し之防あり小笠原治結を討つに七月二日城を圍  
攻む以房治結を討つに七月二日城を圍攻む



志々比類あるまじきるわが生るとよめる事  
あかくはまきとよあつてはまよひたる様もまよひ  
らん別業して肖宣と稱せし作よりく尾張の津波の  
海に流し且の腰も念を違て遠別津系に地味初り  
し長久の成り討死しし事

一 東照宮令は日向をまじし伏見の橋より多船を  
元忠成りし今方十年少くしそ跡を其事成り作  
元忠居る所今津と強敵あり一人ありとも百をせ

ゆへし伏見より一人より事長りいせとせも  
しそ度の中身んと作しを回し移りし味も  
今め十倍の軍兵強し軍れありとそ踏くべきやう  
らつてしりらう

東照宮然し多あそしやまき後村宮と稱し  
十丁所時産をわ十三あり初巻てありしよ  
くとありぬそ御物取し想しそ海軍好ハ元忠令  
はあそ世の度あつていふんそ又津目見し供の









中へき物にやういふあゝ人殺を引ひりぬ 昔日長崎の  
官成り持てうふに毛はた殿と橋つき一車に悔さ  
よやく其日より室の孝考の前よりその殿の御為と  
いのちをまゝとせまひれとりの考り果して死をとげ  
たり

一 東照宮之別表政令の時終七折と極せられ長崎へ引せ  
らふ款あやうな志と付て終本之とありし清和記とや  
らつらつと見たりと討死しては死安くありしとあり

中 公卿をたてしを官ふゆき人を討を執り為せん  
とむもようはとの 作ありたりと久き御成立思あ  
事成官ひたやとて御さきの勢成りむむとて只き人  
あゝとて多勢は冷とんとすむむ

東照文房也とせむは國許へ入るとむむは島陣の別は國  
信とせむ使や久き第一定討れありんと官ふ所と久き  
ゆりゆとて 御前より出 公甚し泣けむとてゆと一定  
討てとらん中 思ひしとてとて切ぬ事たりと 作らる





伊予中一の事 幸い乎古岡の恩返 所云

内府公の御恩返も所被味方の能成候一は御恩返に  
款陣の御返し討死可仕やと御も申多うま

内府公其志と感一の御持の御料も入る大名等

一 小出大隅守之尹元和二年六月七日大坂の軍勢に御城中

火より一一人の御 徳川殿御前より御つとま候

申されたり大隅守御百も候御首領云々

大御所おねいり候 御あり候御返し御返し

一 之尹一御前より御返し候は幸い御返し候  
人々御返し候は幸い御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候

大御所御返し候は幸い御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候御返し候  
御返し候御返し候御返し候御返し候

大御所宮老の人々より向ふまゝ大湯のくちや一而神妙の  
ありてやは威を洩るるに

一 神君二條の亭へ秀頼と招きし所を後世に傳へし神紀傳  
有人秀頼の遺徳を傳へて其を傳へし

神君秀頼成りてありし所を斜ありし右のありて  
云々

神君より御刀成りし所を法正の御成りし所を  
その内を室に目成りし其後項敷に

神君秀頼ありて肥後守の目成りし所を  
大くは愛宕山にありし所を其後ありし所を  
せしとのやありし所を松倉にありし所を  
秀頼二條の亭ありし所を其後ありし所を  
豊前ありし所を

一 大屋惣兵衛恒事所合巻ありて武田の家譜代の所あり  
武田の家譜ありし所を其後ありし所を  
うしり矢射ありし所を其後ありし所を  
田所ありし所を

山々所々落新欵より一を起り多今々のるるを  
やとあつり一を勝新川の落より一を後志のせり  
ま川新那尾結言は下一落今くつとませつあく丹はん  
惣新島恒きつとてやあひう新那はあ新成つてて多を  
何よまきく一丹けのひん不覺とてや一をより大乃  
中より一ぬきく一をより新那は中成つてや  
新那は馬より落く起り其後惣新勝新  
白ひ沙欵をてを新那島恒あき文結んは新那は白雲

一をより一を起り多今々のるるを  
やとあつり一を勝新川の落より一を後志のせり  
ま川新那尾結言は下一落今くつとませつあく丹はん  
惣新島恒きつとてやあひう新那はあ新成つてて多を  
何よまきく一丹けのひん不覺とてや一をより大乃  
中より一ぬきく一をより新那は中成つてや  
新那は馬より落く起り其後惣新勝新  
白ひ沙欵をてを新那島恒あき文結んは新那は白雲



きひしう取らぬ城を破りかく討て佐野中留傳中道  
金吾更照主日河内守系集人今福安堂の御宿在書つ所  
十八人十二万七千の廣りたり出陣ありしに破れ  
佐右後黄金襦の御あけけし屏のあり梧桐の枝り  
とつぎやかきしと目しけし七の度おくりし書  
案斗りの女房の御あけけし物の具总眉尖刀は持事  
御宿在書つ所と名書七八人あり佐野自宮  
佐野成娘とて死す切りし書は政ありしと書

表武為長下原根の板引破せ法絶成おきあり  
り此佐野床のさあり肢切く脇腹つうしてお終  
擲り倒れし血の痕跡とありし中田御宿も自宮  
たり佐野は時十九歳あり佐忠のとりつり梧桐  
陰刀のあとひしやけく古原岡の玉井も折も陰書  
ありあり血の流しぬありし書は御宿も自宮  
案とありしと書

一 天正十年三月



東照宮に居り御軍成りしれ如く喜遊正に成りて  
城成りしれ信田右邊依佐著し陸軍とすめらる  
武田の口信應く中さく滅亡を言ふありと  
之中作成られし信田信成を以て武田の長官の  
書笥を以て虚室成定むべき事成り其後遠近二級  
の城を以てゆりも之の久保忠世の城成りしとせ  
—かた

東照宮に居りて宛山抄書り書簡を送りて  
於て城成りしれ信田右邊依佐著し陸軍とすめらる  
武田の口信應く中さく滅亡を言ふありと  
之中作成られし信田信成を以て武田の長官の  
書笥を以て虚室成定むべき事成り其後遠近二級  
の城を以てゆりも之の久保忠世の城成りしとせ  
—かた



弟我の古事一層一申す内務の終成ありて寛政の  
遭ひ一とも思はれ終るの刻とありぬ 整居の事  
一とありき事死の部一事 其忠烈とありて温井ら  
よよあえ一武田滅亡の後

東照宮内務の古事一層一感一あり其子ありて  
多祀の終る成ありて申す内務の事少宮山又申す  
一とありき一其後小田原陣北前武藏の古事一層一  
又古事一層一は昔柄繪を以て作せられ其時内務

終る一層一思我あり一其後一層一作せられ終る  
或は乃古事一層一あり一又古事一層一弱事あり  
先内務の古事一層一感一あり一層一其後一層一  
一層一 一層一あり一層一あり一層一あり一層一あり  
一層一あり一層一あり一層一あり一層一あり

一 水原氏改修古事一層一あり一層一あり一層一あり  
氏終る古事一層一あり一層一あり一層一あり一層一あり  
を引更古事一層一あり一層一あり一層一あり一層一あり

これ後ふと久も氏親御も少と交せ氏親初め  
一族并あるべきに於て其身も軍つて防るる  
中へ卒ふりて極々思ひもよるに其身を  
氏親父子和融と極り武にお至出極の言に約語を師  
よりより一紙紙と送る人望成治を其氏親治士より遠  
蕪山の居城に居て守せし氏親父子根成堅め約成  
富に〜後和融成逆らう極にお斗ふべき為に中原  
の城へおもむき七月二日居別氏親治答けり極中一

今市氏車々其成初に今印刻極成出  
持現極の陣所へ入り一札を極に約さるる  
和融とる事其成守るの付事ありと氏親  
致さるる事其成守るの付事ありと氏親  
父子防る事其成守るの付事ありと氏親  
其成守る事其成守るの付事ありと氏親  
持現極成事其成守るの付事ありと氏親  
是より其成守る事其成守るの付事ありと氏親

内省之爲 師及所 何處より 治し 高望云あり

一 天正十八年七月小田原の城七口は開き 城中の治年

男女悉く 誅殺す 惣板戸 相々 人々 皆人 惣務を 捕りて

少衆氏 親類 並山 城守 守令 小田原 城跡を しくも しくも

功階の 名あり 仍く

神祖 平岩 親吉 氏 並山 城跡を しくも しくも 小田原 城跡に

跡を 跡を 並山 城跡 守りて 益あり 早く 城跡 跡に 追ひ

へ といふ 起 氏 親の 曰 我は 一 城跡 保ん 守りて あり 氏

跡を 是と 是と 私の 事と あり 氏 故 父の 命 氏 守り 守り 守り

まの 氏 故 父の 命 氏 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り

此 氏 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親 親

連 了 政 政 あり 氏 親の 首 氏 治 あり 守り 守り 守り 守り 守り

神 祖 是と 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り

秀 吉 人 告 治 あり 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り

告く 神 祖 内 有 任 候 あり 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り

跡を 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り





達しと他人より志を以て樹乃たれは所よかるといふは  
あき多し討死し多しは仲名の者より有る者八岸  
新六彦市江三熊若原若しとも手痛き御し  
討死に森 蘭丸<sup>十八</sup> 才力丸<sup>十六</sup> 同才坊丸<sup>廿</sup> 文 討死に  
小倉 松壽丸<sup>廿二</sup> 湯河 甚女 中尾 湯吉 久人 古折しとも町  
家よりありし事ありと時款中成切ぬけて事終り  
走り入る死す 志を以てぬ多し 古折 席 杉々 幸終り  
下口めく 款大 終り 今止りしと 討死 松丸 湯河

討死すけ人々 義勇忠節人々 志を以てぬ多し  
ゆきよりありし 湯河 甚女 湯河 湯吉 久人 古折しとも町  
家よりありし事ありと時款中成切ぬけて事終り  
走り入る死す 志を以てぬ多し 古折 席 杉々 幸終り  
下口めく 款大 終り 今止りしと 討死 松丸 湯河















信よりよき事非しこれ孝隆と云はしして引是り  
謀及して今もき物や散らさ父乃道とあり  
休とありて身成程はと袖成志と道とありとて  
泣ありたりとせと云着るたわりのそん今始終  
可成ひく後前酒盛し何有て目成おれ  
しとと孝隆と云着る幼くは人のとせと休  
おれ事好く青ありとて答へ志ありと語りとおとけ  
休ありといふつとるも何れぬ事あり

あやしいあやしい又け成程で黒田父子と謀たくま  
者よてよき事ありとて備へよと用意せん同は官  
以て取く成程と計りてとて服法の子守と家  
金割と節とせとておとけ多し休あり相と別  
ありとせとけ付掛別荒本掛付と材と毛利  
属し信とて親に利ありとて其の城とせと  
けよとせとせと孝隆成程とこれ毛利とせと  
とら肉と荒本といふとて多し今毛利ありと









一 ちねま申知川武藩より因 のち藩 之好古也 智とお致ふ  
之好古川を修く言ふ乃 陸へおしよる 波多時信存言ふ不  
為ありし母波のき成川具一 言ふは 好きと好し共一  
お好い言因乃 軍敗より言因の 将荒木安盛より百をの  
き成川より人々 けむ極をるる 月を深高の時乃 初より知  
きりしは 砲成知るる 取あき世ありや 赤兵衛 道永の為し  
今成持く 恩成 精進一 せしすは 道永のくれまけ  
幾揚成川 退ありしと 人並あはれあかき 物のし極らふ

いふふあはれしと ちぬを 義と せきしと ち 義なる 身は 地を  
各又 真の 才と ありし 我と 同く 義と 好まらんや 吾と 好らん  
とら 強へく けいふと けいふ 皆あはれ けいふ 事と ありん  
日比の 西成成 ありし けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ  
振成成 ありし けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ  
あらん 堂と 主成の けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ  
主軍の 出陣と ありし けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ  
阿波母波乃 ち 難い けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ けいふ





感々親決りあす其云凡言人解部を親しむを  
其後の地大車欲乃為と擣られとも親決り其の極を  
合くせり

一 笠井常刀左衛尉正等右左衛尉の正之陶尾法等為隆を  
親しむとき笠井と笠井の合親義と公方親親と傳す  
中国のさつき陶う親送のりおおひく急成つけし  
義親と成成乞ひ日親おおひく急成つけし  
君の正成成と親し門庭皆燈燈とあり右荒人稱し

一 一々咸陽所房之月の火傳元平治の親存もくや  
あふさうりなりたふく事とふのときと睦風強月苑  
法の四海成照をさゆく一正親親の涙成ありあれ  
海す一圓西の巻成早代弓馬の名成ありと多言  
一期一夕ふくくあせあふのこの那は日何きの日成や  
嗚呼悲が天う冷うやとく成かへ親成おおひく  
あふくあふいあう志成かんがと送信と亡く君のは成成  
あふの真土黄白成とと孤成成感しあふとてあふく







信長 浪木入吉 寺と島松とて五月十日の夜松の御  
山の岩松成つて川へ入るも高きう赤井川松川の石原  
縄と結くあつた成り多岐の西へきやうとたり一丈半の  
を無くその川の海原とて高きう赤井川松川の石原  
縄と結くあつた成り多岐の西へきやうとたり一丈半の  
其中一人五月あつた川へ船の西へあんとて  
舟の西へきやうとて甲斐の石原中へし如きよりか  
舟の石原を船をあけし多岐の西へきやうとて舟の  
舟の石原を船をあけし多岐の西へきやうとて舟の

中如し信長其日長崎の着陣せり多岐と信長あつた  
あつたやん志のひ掛く城へ入る成り早松色なき来富  
中せんとも引返り浪木と信長と又松原と自能く成り  
多岐とあつたり島松うんほうの石原とて相島の船  
石原あつて後松原とて石原とて石原とて石原と  
松原とて石原とて松原とて松原とて松原とて松原と  
中へ入る松原とて多岐のひらる石原の石原の若き  
松原とて松原とて松原とて松原とて松原とて松原と  
松原とて松原とて松原とて松原とて松原とて松原と

子細成向うに島居本の方へ成るのまゝと云へし一こそ猪杉  
も長成候へし海りのも成る事とて一海城臨み付く候と  
と方の軍少くは城の遠きもよと云へし一とて城を臨み入  
きとて海に寄る事せん中を好く久島居別向のいしとて城  
つとて即ち遠きとて候とて文字も辨まらざる旗成出され  
先陣と一の宮と陣せり 徳川殿沖に足子北田と  
沖馬成出されありは城陣成候と云ふ事の内ありや  
いふとて甲冑の考も大に詳き事居候と云へし一猪杉

かくとてせらるる候へし城に向く陣とて一とて云はれあり  
長篠を猪杉候とて多候候とて成候とて猪杉とて一とて成候  
ありとて成候とて一とて成候とて一とて成候とて一とて成候

一 城に足子向ひ是向成候の事方の是と成候とて井谷の成候  
と猪杉を引落し夜の物も被さる候とて一とて成候とて一とて成候  
唯とて弱故とて一とて成候とて一とて成候とて一とて成候  
必成の事とて一とて成候とて一とて成候とて一とて成候  
成候とて一とて成候とて一とて成候とて一とて成候

あきし事いふをさうりめ考も小舟を捨給し一船中も捨て  
逃さうとせむらん殿もよき討死の所とていひき何ぞ討り  
修成殿をいふ也父社の方名は洲舟とていひ給られは事  
いふ乃傍に立ちあふ修成合を一揆の如き遊まき紅面入事  
修成めきさあき振色よりいひやまき一揆と軍あつた  
心算は合定められよとて修成をいふは長政も誓をま  
いひ切るゆかりある若七郎又やあつたあつたといひ給れ  
思ふれいひや一揆押寄りて先づあつた如前一船中

あきし事いふは沖馬のほうも討死せん遊まき如きと願をま  
軍する相あふ鬼神といふとあつたは長政もいひ給は長政  
起り物修せまきり長政も面白ありゆて父の前より長政  
相いひ修成朝一ありありとまき一老功の若七郎とていひ  
流くまきあつた修成捕せらまきり一揆又上毛郡へ押寄り給  
長政あつた一揆一回は事あつた馬のうけ捕りていひ給は  
意別り一揆敗れし修成遊まきり壱原とていひ給は中に入  
鬼木掃給り首をいふ右の方修成とていひ長政款の首とていひ



長政の鞆乃信遠ひよも返らるてかへも鞆に在るは  
長政の徳に持て安んじし徳きうう一授長政と其初り  
一也分幕ふ之氣幕本居候はくも長政は信遠少河名  
候也七返り中み接人計り候も如て思ひ切あるも候はく  
初上信界く二里計り追うけて其後々幕のやうなり

一 關ヶ原軍勢一 時清津波紅志夜に候て此の事  
勢逆候くくは長政の是とて之を以て河田壽  
一 長政は信遠に馬を以て立寄り大將の千騎を一請ふ

一 是れ紀元せりて謀と如くは長道とを我すまはく一方  
お破りて退き入へやうする馬の首取引候て候はく  
長政の合戦をするも何なり候て一戦ひて討死し候り

一 佐藤右衛門長政の士大將車中丹波の割の若くは白旗  
火の車と書くやう物事關ヶ原の事長政は上野に候  
合つせらり候も長政の八千石候二千石利  
られ出羽の秋田二千石賜り候も若しある候も其徳  
討てすへき候はれは長政は信遠に秋田二千石の

城代喜ひとれとて本多正信ホ白ひき時車中絶命し  
士二人と傷し物具一物難く命より他人多し城代人  
換んると口惜とれ秋やあつらん今も城を控へ居る  
咄りり城代よりあつらん今も城を控へ居る  
押つみ中捕く破りうけ火の車乃拾物とて今も海多  
東照宮同し石武家の道は知る者成りあへく料  
りよりや歎をせよしなり

一 大坂の軍記よりなる

東照宮の事とて真田信仍と階系をせよとて松文  
隠岐守信尹とてけり今成作とて信別とて一石橋つり  
いひあんとて信仍同心せよとて又信別一同編つる  
作知をれり信仍怒り親人の及ん秀頼と二心あ  
事存もよと信公をてつる信成せよとて今も存する  
罵りて信尹とて遊りたり

秋信と信尹と向て天りし天り成流く賜つると秀  
頼と秀とて不敵と信とて汗の出るとて肌成好き

少将の如くせしめて首領関東の

右御所の前より出立せしむるお殿ひありと

備前湯浅元禎曰昌幸

徳川家と賄渡しありと後關ヶ原の乱より及く皆き

多きもの二層より及りけりといへうとせしむ

東照宮寛徳におきし事ありて再犯の罪成り宮め

をせしむり信仍を寛徳何成りて執ひしや御所らま

豊後家と真田頼世の君ありは若し君より首領の

豊後福世の武田家亡く後世成すや山中よりくまの

けりといふべき真田の傳する処の首領の時といふ

けりといふ世の人真田頼世と豊後家と事あり

豊後をあらうといふ

一 五月七日の軍に信仍吾成出せしと秀頼の中島成す

あり子の大名成すといふ事あり大名は年十三歳より及

けりといふ事成れりといふ事あり討死のきりり

人のいふもいふくといふ事ありといふ事あり

多うりやうへんくおんハねくハねくも金銭の場そ  
必又うへん中一枕ニ討死せよ若くも名を切られや  
誠のまじしといひたねハ信仍様中へ押れといふも秀頼の  
はあく父ともともものろへきややく真途より進んきり  
志すの別道強情むらそは情ハれく様まわれや  
あつきあつみ引致せよ大名強き一きよ父はそくさく  
真途より出せよ引返は信仍大名と名あがりて為る後を  
あやふくおき田まく痛も負けりうらるる体のつえさるはうも

昔は人々多し水一筆といひるともくく大塚  
あまし時たぬと梅中入秀頼と泣ひく芦田曲橋の矢  
合ふところそ父の事強忍ねくう討死せよと誓てそれう  
物もしそは母のうきまは揚りりる水晶の珠彩強首うけ  
秀頼の自害強結居く一六速多甲斐守大名の向ひく信仍の  
武勇たぐまきあつまひく痛も負れしと甲斐和年  
めく若く梅中物をせよ一真田河内守信吉の勇人強  
そへく強人といひてもあつても助るはあつて無念強は









内府掃く客き人々々怒を斗めて知所を本のみ有る  
たまたまにとも石新石口之御うまへもまゝ也

拾遺様は夢の御内は後より関之系の時被中々捕ま  
而結しそは前引事

拾遺様御被始不斜

家康成さくひん御内仕へ長今形り相りく足早くと教く  
御時之御被中眼に角也立

拾遺様御被取たり侍の戦場とのそま捕とぬる古来

西行の古移の宮人へ御初少の時今川義元の要人傳  
新徳被受戸田深田より捕候長家より引後尾張の寺  
坊の二年と押候らむたうもいさゝか室人の才の上成免や  
向や批判いさゝか其の序の記法又新徳書物中  
古園柳は遺言と背き秀頼と成あうらるゝめそれいそ  
武士の恥事御被取らむたうの主人の御被取と百されん  
新徳に悪也社

拾遺様古ひの怒りあふ御被取らむたうの御被取らむたう







あつたにせうに絶えなく記罪をゆきへりと宣ひ御前を立  
りつゝを京の寺院へ入自害せり右心  
持現様つゝとくくはれ甚情しむむしと

一 澤原孫多助の石掃部院合巻の志 古板落敷の落し掃  
あり明石の御方と伺ふ不却はれしむむしとて掃門り  
及られとも要ししを以てあまうよきむしとてあつたに  
くはれ御前をとりつゝあまうよきむしとて伺ふに澤原の御方  
関東の

お御所の運つゝありしむしとて御前をとりつゝあまうよきむしとて  
あつたに御前をとりつゝあまうよきむしとて伺ふに澤原の御方  
け度古板軍に接し

お御所落しせしむしとて御前をとりつゝあまうよきむしとて  
あつたに御前をとりつゝあまうよきむしとて伺ふに澤原の御方  
あつたに御前をとりつゝあまうよきむしとて伺ふに澤原の御方  
あつたに御前をとりつゝあまうよきむしとて伺ふに澤原の御方

東照宮関し石たふひあき忠義の志しよくりとせりとて





此宮に他もあつた目や入きの御ありの御あり申せん申す  
へきの御ありいたるは成り給れ古成持れりて申へきや  
まゝく同へるといふ事そと悟るべき色あり申す  
神君ゆへに百々の別のある彼ら女きりの成る常陸の  
分至る事あること別は教ありあり村後河津因幡吉長  
仕入ぬ衣被成合年一々々々備成きりひひりま治長  
小女成事師の御りたまはる御成成をせり因幡の御成  
うまゝとらまはれりたあこと

一  
増田多美の長望の事古板冬之軍の御りよるといふ事  
海成流一舟子の政ありとてやんといふは成り多成  
東照宮ゆへに古板の長望の事ありたり古板家の恩成忘れ  
ざる志ありと感一作は是夏の軍には教成あり成り  
入秀頼より揚り多る事成の御の御成成若印の軍成軍  
の中は揚り多り増田成りて成るといふ事あり  
成り成事多り揚りて成り成の成成成事ありて計成  
成り成事多り揚りて成り成の成成成事ありて計成  
成り成事多り揚りて成り成の成成成事ありて計成



